様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２３　年　６　月　１日現在

機関番号：　４４３１６
研究種目：　若手研究（B）
研究期間：　2009～2010
課題番号：　２１７２０１０６
研究課題名（和文）　現代英国文学における戦間期表象の意義

研究課題名（英文）　Importance of Interwar Representations in Contemporary British Literature

研究代表者
廣田　園子（HIROTA SONOKO）
京都女子大学短期大学部・文学科・准教授
研究者番号：３０３６８５５０

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦間期という新しい概念が注目を集め、1920 年代及び 30 年代のテクスト研究を活性化させると同時に、2000 年代の英国文学を代表するテクストが揃って戦間期をテーマとするという顕著な現象が発生している状況において、現代英国文学における戦間期表象の意義を検証することを目指した。そこでイアン・マキューアンのテクストを中心に、エマニュエル・レヴィナスの哲学を参照しながら作家たちの倫理的葛藤を分析し、学術論文の形で成果を得た。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the importance of interwar representations in contemporary British literature, considering the current literary scene where many influential novelists have chosen to set the stages for their novels in the interwar period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　文学・英米・英語圏文学
キーワード：　英米文学・文学一般

１．研究開始当初の背景

(1)　「戦間期」という用語は、従来の 20 世紀英文学研究において支配的であった「ハイ・モダニズムの 1920 年代」と「経済的不況と政治的不安の 1930 年代」という二項対立に代わる概念を象徴するものとして、近年様々な分野において急速に浸透しつつある。第一次世界大戦を分水嶺として花開いた審美的・実験的文化の粋としてモダニズムを特別視する傾向が過去のものとなりつつある現在、とりわけ活況を帯びているのが 1930 年代の英国に関する諸研究である。こうした

1930 年代文化の再評価のもとで、従来的な枠組みから解き放たれた「戦間期」という時代に関して、今後ますます諸方面からの革新的なアプローチが活発化することが予想された。

(2)　その中で研究代表者は、このような潮流を敏感に察知した英国の現代作家たちが、続々とこの戦間期を舞台にした小説を発表している現象に特に注目した。Kazuo Ishiguro の *The Remains of the Day* (1989) や *When We Were Orphans* (2000)、Ian McEwan の *Atonement*(2001)という第一線の作家の代表作に加え、大衆推理小説の分野においても戦間期の英国がクローズアップされている。とりわけ興味深い事実は、これらのテクストの多くが単に過去を甦らせる歴史小説からは程遠い位置に存在するという点である。作家たちはフィクションと歴史の狭間を追求し、現代文学の新たな可能性を探る絶好の背景として、戦間期という激動の時代を意識的に選択し、この時代と我々が生きる現代社会の双方を貪欲に再解釈、再構築していると考えられた。

２．研究の目的

(1)　研究代表者は Virginia Woolf を中心とする戦間期文学について研究を重ねてきたが、2008 年出版の『転回するモダン:イギリス戦間期の文化と文学』（研究社）の掲載論文執筆に際して、現在の英文学批評における戦間期テクストの重要性を再認識した。そこから、既に遂行してきたカズオ・イシグロの作品研究を更に発展させ、現代文学における戦間期表象という新たなテーマを着想した。そしてマキューアンの『贖罪』等の戦間期を舞台とする現代のテクストを幅広く考察し、その表象の意義を検証することを新たな研究の目的と定めた。

(2)　更に研究代表者は、2007 年の日本ヴァージニア・ウルフ協会第 27 回全国大会におけるシンポジウム「National Culture と (Step-)Daughter たち：英国戦間期女性作家を再考する」に講師として参加した折に、推理小説作家 Dorothy L. Sayers とウルフとの関連性について論考したのを機に、戦間期を代表するマス・カルチャーである推理小説の文化的意義に注目するようになった。このジャンルからのアプローチを本研究で取り入れることによって、更に重層的な研究成果を得ることを目指した。

(3)　マキューアン等の現代作家については、彼らの変化に満ちた旺盛な創作活動に未だ文学批評が追いついていないのが現状であった。マキューアンに関してはようやく 2008 年に 3 冊の研究書が相次いで出版されたが、既刊のものの多くは大胆に変容し続ける彼らのテクストの変遷をなぞるに留まっていた。また Peter Childs の *Contemporary Novelists*(Palgrave, 2005) や Richard Bradford の *The Novel Now*(Blackwell, 2007)など、現代文学を俯瞰した形の研究書は総花的議論に終わり、フィクションの中の歴史表象に関する顕著な潮流は見過ごされている。こうした状況の中で Rebecca L. Walkowitz の *Cosmopolitan Style*(Columbia UP, 2006)はモダニズムとコスモポリタニズムを結び付け、戦間期文学と現代文学の連続性を論じた数少ない力作であるが、現代作家が極めて意図的に戦間期をテクストに取り込んでいる現象については省みられていない。こうした批評的空白を早急に解消する一助となることが、本研究の大きな目的の一つとなった。

３．研究の方法

(1)　研究代表者は、マキューアンの『贖罪』

を中心に、戦間期を舞台とした多くの現代文学が「歴史小説」としてのアプローチを断固として退け、常に歴史を恣意的に再構築したフィクションであることを前景化している傾向に特に注目した。小説家を主人公に据えた『贖罪』は、テクストにおける「歴史の書き換え」が不可避であることを強調してやまない。研究代表者は、2010 年度に英国において資料収集を行い、『贖罪』で重要な役目を果たす帝国戦争博物館で様々な貴重資料を見学した。『贖罪』の主人公同様、マキューアン自身もこの博物館でリサーチを遂行し綿密な情報収集を行ったにもかかわらず、『贖罪』における過去の描写には恣意性がつきまとう。こうしたフィクションにおける「歴史」あるいは「真実」の位置づけに対する葛藤が、現代作家たちが提示する戦間期と現代との交錯と密接に関連していることを検証したいと考えた。

(2)　前項の研究を進めるにあたって、戦間期文化の重要な一翼を担う推理小説ジャンルについて、これまで遂行した研究を更に発展させ、戦間期表象における「真実」の諸相を考察した。Agatha Christie に代表される「黄金期」推理小説が様々なメディアによって現代においても幅広い人気を博し、またマキューアンの『贖罪』、イシグロの『わたしたちが孤児だったころ』が共に推理小説を下敷きにしていることは、現代の戦間期表象におけるミステリ・ジャンルの重要性を顕著に示すものと言える。イシグロやマキューアンによる推理小説の脱構築において「真実」が常に恣意的な「虚構」の一つとして提示される現象を検証すると共に、戦間期の推理小説ジャンルとその他の文学テクストとの関連に対する理解を更に深めた。

(3)　フィクションにおける「歴史」及び「真実」の葛藤というテーマを掘り下げるために、特に近年、文学批評において重要性を増している Emmanuel Levinas の著作についての知識を深めた。レヴィナスの哲学は倫理批評に欠かせないものとして広く位置づけられており、その独創的な「他者」に関する概念は、倫理的志向を強めるマキューアンの姿勢を『贖罪』から読み取る上で、特に有益と考えられた。

４．研究成果

(1)　戦間期を代表する推理小説作家ドロシー・L・セイヤーズと、所謂ハイ・モダニズムの象徴とも言えるヴァージニア・ウルフとの関連性を考察した論文「炎上する女子コレッジと「パラダイス」の探求」を発表した。本稿は、前述の 2007 年に研究代表者が行ったシンポジウムでの口頭発表を、更に発展的に加筆修正した論文である。ウルフは、『贖罪』において若き日の主人公が傾倒する作家として繰り返し言及されており、彼女の多面性を捉えることは『贖罪』におけるインターテクスチュアリティを検証する上で、極めて有意義であったと考えられる。

(2)　従来から研究対象としてきたカズオ・イシグロの、『贖罪』と同様に戦間期を舞台に過去の「事件」がもたらす影をモチーフとした『わたしたちが孤児だったころ』における、現実と虚構、被害者と加害者の曖昧性を検証した英語論文 “Consoled by Fantasy: Kazuo Ishiguro’s *When We Were Orphans*”を発表した。この論考を発展させることによって、現代英国の作家たちが自らのテクストにおいて、善と悪の境界の曖昧性という倫理的問題を戦間期表象に反映させている現象を、多層的に裏付けるという成果が達成され、マキューアンの『贖罪』研究に積極的な効果をもたらした。

(3)　イアン・マキューアンの長編小説『贖罪』

をテーマとする論文を執筆した。現在投稿中の本論では、従来の批評で省みられることがなかった、1935 年の免罪事件の「真犯人」と主人公が断定する人物ポールに焦点をあてることで、彼女が主張する「真実」の脆弱な論拠を指摘し、主人公と作者が共有する他者との関わりの問題点を検証した。

従来の『贖罪』批評において、主人公ブライオニーの他者との関係性は、彼女の誤った告発の犠牲者であるロビーとのつながりにおいて論じられることがほとんどであり、ブライオニーが彼の意識を再現するという行為によって彼の他者性の受容を達成したという積極的な評価が多数であった。しかしブライオニーは自らの贖罪のテクストの中で、その意識が閉ざされたままの新たな「他者」ポールを真犯人と名指しする。黄金期推理小説と比較すれば、このブライオニーの「推理」の基盤が脆弱極まりないことは明らかであるが、彼女はこの「真実」に固執し、一切の留保を認めない。

そして興味深いことに、テクストの他の点においては真実あるいは歴史の再構築の恣意性が絶えず強調されているにも関わらず、このブライオニーの「もう一人の他者」ポールに対する専横は、作者マキューアンによっても是認されているように見える。9.11 同時多発テロ等についての様々なコメントでも知られるマキューアンの倫理的姿勢は、常に「他者の心に入り込む」ことを基盤としており、その心が閉ざされた他者に対する彼のスタンスは不明瞭の感が否めない。マキューアンとレヴィナスを関連づける倫理批評を試みる研究者は多いが、他者の不可知を何よりも尊重するレヴィナス的倫理を、マキューアンのテクストに見出すことは難しいのが現状である。

このように、戦間期を舞台とした現代英国小説のテクストには、21 世紀という革新と不安が分かち難く結びついた今日を生きる作家たちの倫理的葛藤が色濃く映し出されている。今後、更に多様な現代のテクストにおける戦間期表象を探ることで、戦間期と現代を結ぶ興味深い要素が明らかになることが期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 廣田園子、「炎上する女子コレッジと「パラダイス」の探求」、『英文学論叢』第 53 号、査読無、2009 年、1-12 頁。

② 廣田園子、 “Consoled by Fantasy: Kazuo Ishiguro’s *When We Were Orphans*”、『英文学論叢』第 54 号、査読無、2010 年、14-32 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

廣田　園子（HIROTA SONOKO）
京都女子大学短期大学部・文学科・准教授
研究者番号：３０３６８５５０